平凡（三十八）

吉もものいはれるのはだかりとなつて居る。

ゝ底を居らぬ。居らなければ、迎えがはじまる

気ばかり逸るから、居るやうに見えひつ

てゐる。それで況しも一度は生命といふ

事を忘れる。

扨も京東一もの、やうと半年と地さをゆ

もう吉の家居らてるつこと。私の事頂ゐつてる

ゝ学校の人も遠いて人抵仕士で、私の脈下ど

2

かりではない、数と申年と云の寄らてゐる
云なる点迄で、四人共ともは皆佳い人、
迄のやうなるてゐるこが、東京へまて教し
く接して見ると、悪と云ふ程の佳い人も
へなくなる。或る後り悪い人迄で、
悪と後を決点してある。と、もう出紙点と指
へて軽侮の念と化す。最初から善色の人ど
と思つてゐると、軽侮の念も化らずかつ
さらうが、佳い人とゐつてゐるこが佳くない
のでそれを共人の発でもあるやうに、自

東京朝日新聞原稿用紙

ふつゝ卒と相を拾はせて写いて、只是性偏の
命と記す。

思ひのまゝを書かれるばかりでない。大に口吟し
てゐると自由党の名士も、[illegible]
[illegible]への言としい時と年のてれい、及
社党の中傾近うも知れと思ひはかう、いろ
う書物を読へて、これを性偏の命と記す。

性卒と字はするのゝ代言の書年の初やう
性卒の性伝するのが命の書年の高うも知
れなが、書物なるいろへてみない、只性偏

4

して来て居るか。これは後ち人の信仰
がからでない、物の信仰も矢張りおしなべて
と云ひる。

で、そこの中が何となく淋しくなつて来るが
ら、自然と双方の信仰する社会を新れて
来ることもあるる。

かも知れぬ、その変化と社会の外
れて、遂に之を宗教的に成すに成るさ。

信仰みと言ふ人もあるが、
然し信仰人、社会の外
ぬど信仰見えなからうが、

5

紙れて後のをかち眺ちると、他人の一生を
涵養考えしい。で、私は社会を経験
を今日のうえと但しなく明下を君示してみ
る。

私は法律とは大なるものであることが、明かに
人生大なるごとく、今日半ばすらも之
をうまうまうと祝とを唱へるやうな、自由の大
義と叫へやうとの為にて、空にこんと抗日で
ないとは之をもを他りで、道来
の何かの理解でない。或は之をもを他りで、道来
の何かの理解でない。

6

学の通ると上ちゃんかも知れないと思うて、
そばにとんぼがとまってゐるばかりでなく、
他も同じく羽を開き立して羽をもて周囲の中を直ち
に見ゆるのみなれば、定めしふくまるふい方が家
学てゐないと思ひながら、ちゃんと同じ
と周囲と変わらざる
今が思ふと、めまぐるしく変化なる事ばかりと
ゐと一つ以て思ふてみれば、不必要なり信
じ居るのは一向平気で、教ゆる学校
の時りるは仕方なしと思ふと、立ち宣に

7

さんのようなびやかな、陣うて来て、何の
ひとつとなつかるうえ人とは好き嫌ひとしやう
とすると、あのるるはれもおかない。まんの
ち病かとゞまりて、出てかへ行かうとすると、
宮はさんの親ゆゑ強ふて入らと用いて拉ら
ゐてもらうとして、とゐは兄さんが宮でまよと
いふ、宮はさんの陣あのおとりえるか
つとり、ちゆで、大和さん、一ま入らッて
やい、ゐらゆるるかうといふ。